

津山郷土博物館だより「つはく」

# 津博

TSUHAKU

2017.10 No.94

## トピックス

夏の学習プログラム  
博物館実習の受け入れ  
収蔵資料の貸出

## 研究ノート

「竹土手」に囲まれた城下町  
尾島 治

## お知らせ

長期休館のお知らせ  
友の会の今後について



津山郷土博物館

Tsuyama City Museum

# プログラム

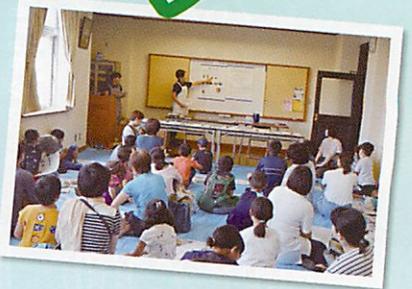
## 勾玉をつくらう

開催しました。弥生土器を作ろう(7/27・ボ玉を作ろう(8/9)の講座に92名の方は、それぞれの講座を熱心に取り組み、土器を作りました。出来上がったものは、



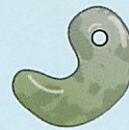
東小学校／1年  
秋田 泰杜さん

たのしかった。はじめてさんかしました。またいろんなことにちょうせんしたいです。みがくとつるつるになったのでうれしかったです。



新野小学校／2年  
土居 晴子さん

はじめてまが玉を作りました。みほんみたいには、できなかったけどかわいいまが玉ができたと思います。来年も作りたいです。うれしかったのでありがとうございました。



加茂小学校／3年  
湯浅 由梨さん

ノコギリできるときは、たいへんむずかしかった。サンドペーパーでみがいたら、とてもきれいになった。きれいなまがたまができてとてもうれしかったです。

加茂小学校／4年  
厨子 紅怜葉さん

勾玉で②番のけずるところのけずるのがむずかしかったです。あと3000年くらい昔からあることが分かってうれしかったです。また勾玉を作りたいです。夏休みの工作にもいいと思いました。

高野小学校／4年  
毛利 碧さん

まが玉の石を切るのがむずかしかった。まが玉の形をととのえるのがむずかしかった。まが玉がつるつるになっておもしろかった。また来年もしたい。

岡大附属小学校／5年  
吉田 有希さん

勾玉作りはむずかしかったけど、かわいい勾玉ができたのでよかったです。先生に手伝ってもらえてよかったです。また作りたいです。家のけい光ペンで色をつけてかざろうと思います。ありがとうございました。楽しかったです。

弥生小学校／6年  
築山 桜汰さん

土器を作るときに割れないように一生けん命していると、あっという間に4時になってしまっていて、割れるかが心配だった。焼く時に少しはなれても熱かった。その時に「パン」と音がして割れてしまった。せつかつくつたのに残念だった。でも、もう一つあるからそれに期待している。つくるのは楽しかったけどつかれた。またきかいがあればしてみたい。



# トンボ玉をつくらう

南小学校／5年  
松本 沙羅さん

見ている時はかんたんそうだったけどじっさいにやってみてすごくむずかしかったです。最初は少しこわかったです。でも2本目からなれて、こわさがなくなりました。もようをつけるのと、色がまざり、とてもキレイでした。いろいろな色の組み合わせをしていがいキレイな色もありました。あまりトンボ玉を作るきかいはないのでとてもきょうような体験になりました。こわかったけど、2本目3本目となるとどんどん楽しくなりました。今日はありがとうございました。

高倉小学校／6年  
小椋 敬郎さん

トンボ玉をやったのは、はじめてだったけれど、上手に出来たのでよかったです。今日は本当にいい物を作れたのでよかったです。ありがとうございました。

高田小学校／6年  
森山 珠妃さん

つくるのがすごく大変だった。きれいに出来たのは2本くらいしかなかった。でも自分で作ったから家に持って帰ってなくさないようにしたい。もう6年でこれないけど何か機会があったらまたしたい。楽しかった。



# 夏の学習

平成29年度夏の学習プログラムを8/16)、勾玉を作ろう(8/8)、トンが参加されました。参加者の皆さんとても素敵な勾玉やトンボ玉、弥生夏休みの宿題や宝物にするそうです。



# 弥生土器をつくらう



鶴山小学校／5年  
三谷 介晟さん

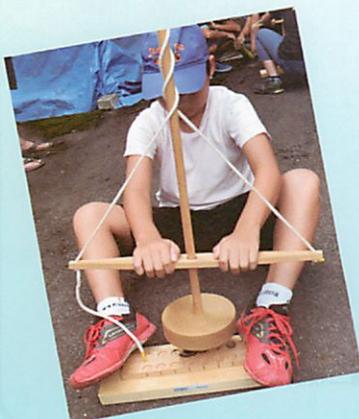
はちやつぼをつくるのが楽しかったです。けれども、自分の思うようにできませんでした。土笛もつくりました。難しかったです。野焼きをしている間に、館内説明を聞いたり、まいぎり法という方法で、火をおこしたりするのが楽しかったです。

西小学校／5年  
谷野 仁美さん

最初はただ作って(弥生土器)焼くだけかと思っていたけど、津山のいろいろな事を勉強したり火をおこしてみたりして、いろんなけいけんをすることが出来ました。中でははずしいなか、外では暑いなか、弥生土器で夏休みの小さな思い出が出来ました。外は弥生土器が自然に温まるほど暑かったけど楽しかったです。

南小学校／5年  
柴田 誠也さん

昔は、火を使うのもお皿を作ることも、たいへんなのだと思いました。じっさいに、弥生土器を作って見て分かったことは、つぼなどを作るときバランスが悪いと、形がくずれてどんどん大きくなることです。野焼きするとき、火の周りに土器を置くと、すごく熱かったです。火をおこすのも、道具を使うのがむずかしかったので、昔の人は、火を使うのにも苦ろうしていたんだなと思いました。土器の作り方や、火をおこす方法を教えていただきありがとうございました。



## 学芸員実習生を受け入れました

8月2日～9日まで、博物館実習生を1人受け入れました。博物館実習は、学芸員資格取得のために必要な科目の一つです。

今年度は、夏休みの子供向け講座の補助、写真撮影や資料整理など、博物館の様々な業務を行いました。



博物館実習

がんばって  
くれました!

博物館キャラクター  
お「パレフ」

## 出雲市・諫早市との3市交流展に 資料貸出中

津山市・出雲市・諫早市の友好交流都市締結35周年を記念して、10月14日(土)～11月26日(日)まで、出雲市の出雲文化伝承館で行われる「交流35周年 出雲市友好交流都市津山市・諫早市三市交流展」に当館から「江戸一目図屏風」、「大身槍・熊毛槍鞘」、「萌葱糸絨二枚胴具足」等を含め16点を出品しています。みなさまぜひ、ご覧ください。



熊毛槍鞘



展示風景



萌葱糸絨二枚胴具足

# 「竹土手」に囲まれた城下町

はじめに

津山の城下町の形成過程を考える上で、正保年間作成の美作国津山城絵図(図1)の検討は欠かせない。その美作国津山城絵図に特徴的な描写のひとつに、城下町中心部を囲む「竹土手」がある。元禄以降に作成された城下町絵図に見られる形を城下町の完成形とするならば、正保二年(一六四五)頃の状況を示すこの絵図は、未だ未完成であり途中経過にある城下町を示しているものである。だが、それは同時に、城下町建設当初の計画や意識が、様々な変更を経て失われていく以前の姿として残されていることを意味している。

ここでは、城下町中心部を囲む「竹土手」の変化に注目する中で、そうした初期の城下町形成過程の一端を探ってみたい。

## 「竹土手」の配置

川などの堤防に竹を植栽して堤防を守ることは珍しいことではなく、当時としては一般的に行われたことである。美作国津山城絵図では、城下町中心部の西部と南部を囲む形で、竹を植えた堤防である「竹土手」が築かれている。

その「竹土手」は、藪田川の上流から始まり、藪田川と吉井川の合流点を経て城下町の南部に回り込む形で吉井川の「竹土手」となり、一部途切れながらもそのまま宮川と吉井川の合流点付近まで続いている。この内の二ヶ所の途切れは、川に降りるための雁木(階段)ではなく大きく途切れており、特別な意図があったと考えられる。そこで、城下町中心部の西部と南部の「竹土手」を二連のものとして、途切れに随って三区画に分けて考えてみたい。

まず第一区は藪田川から南新座まで、第二区は吹屋町から河原町まで、第三区は途切れ部分の伏見町を除いて材木町とする(図1)。

第一区は、石垣のある部分と無い部分があるが、いずれにしても堤防上に道路を設けない「竹土手」となっている。土手の内側は、少し空き地を配して武家屋敷地となっている。第二区は「竹土手」ではあるが、堤防の石垣の上が道路となっている。内側にやや広い空き地があつて町屋敷地となる。第三区は、堤防の上に道路を設けない「竹土手」で、そのまま材木町南側の町屋敷地に接している。

なお、城下町の北部については川土手そのものが無く、また、東部の宮川については急峻な崖の下なので、「竹土



図1：美作国津山城絵図、内閣文庫蔵

尾島 治

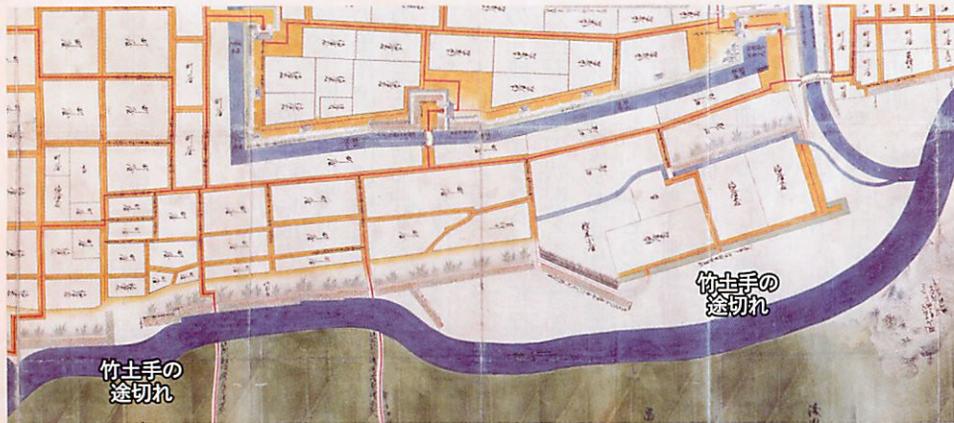


図2：竹土手の途切れ、美作国津山城絵図、内閣文庫蔵



図3：竹土手の変化、津山城下町絵図、当館蔵

広い(図2)。これらの途切れはいずれも、本来は吉井川からの荷揚げのための空間であったと考えられる。ただ、その目的の違いについて残された史料はないが、大胆に推測すれば、吹屋町南堤防の途切れは吹屋町の鋳物の資材や製品の搬入・搬出など、あるいは吹屋町が形成される以前には、その北にある新魚町・元魚町の海産物などの搬入場所だったかも知れない。

後に、この途切れは塞がれ、その痕跡として吉井川の川原に降りる道が残されることになるが(図4)、ここが塞がれたのは、今津屋橋南に船着き場が整備されたことに因りその役目が



図4：竹土手と川原への下り道、津山景観図屏風、当館寄託

この城下町中心部を囲む「竹土手」の竹が次第に失われていったことが、城下町絵図の比較から見取れる。享保八年(一七二三)頃の作成と推定される津山城下町絵図では、堤防全体に竹は描かれていないが、第一区の堤防部分の内側に土塁などを表現しているのに対して、第二区と第三区の堤防では、堤防がそのまま町屋敷地に接しているように描かれている(図3)。

この違いは、土塁がある第一区には「竹土手」が残存していて、それ以外の第二区と第三区は、町屋敷地が拡張した結果として「竹土手」の竹が撤去されたことを意味している。

第二区の土塁にその後も竹が残されて

終えたためではないかと推測する。

では、伏見町の途切れは何かと云えば、城下町や津山城建設の材木等資材の陸揚げ場所だったと推測される。これは、伏見町の古名が片原町で、町の半分が資材置き場だったとする伝承とも符合する。また、後々まで、藩の材木小屋や鍛冶場が設置されていることも、推測と矛盾しない。

**「竹土手」の一部廃絶**

「竹土手」が大きく途切れているのは、南新座と吹屋町間の川原部分と、河原町と材木町の間部分、すなわち伏見町部分である。両者の途切れはその大きさに相当な違いがあ

「竹土手」の途切れの意味

手」は不要であったと考えられる。

り、伏見町の途切れは、材木町の「竹土手」を敢えて吉井川の堤防として意識しなければ途切れと思えないほど

いたことは、享保七年（一七二二）の津山御城下惣絵図の藪田川土塁部分に「藪」と記載されていることや、文化七年（一八〇）頃に津山藩絵師鎌形惠齋によって描かれた津山景観図屏風に「竹土手」そのものが描かれていることから明らかである（図4）。

また、第二区部分で竹が撤去された後、町家が堤防に隣接していたことは、やはり津山景観図屏風の描画から明らかである（図5）。

この第二区と第三区における「竹土手」の廃絶と関連して、美作国津山城絵図とその後の城下町絵図の比較で確認しておくべき点を二点取りあげたい。

その第一は、城下町の町屋敷地の南への拡大と共に、堤防沿いに藩の米蔵が整備されていることである。美作国津山城絵図で「足軽町」（図6）となっている場所に、後には東西二棟の川戸蔵（図7）が置かれていたのである。この川戸蔵は、農民による年貢米の搬入と、高瀬船による蔵米搬出のために設置されており、当然、船着き場の整備と共に進められたものと考えられる。

また第二に、美作国津山城絵図ではしっかりと石垣まで描かれている材木町南「竹土手」（図6）が、後の絵図では石垣すらも描かれることなく、石垣下の本琳寺大溝のみが描かれるようになってきていることである。これは、本来は城下町の南岸であった材木町「竹土手」の更に南に藩の施設や重臣の下屋

敷が整備されることによって、城下町の範囲の意識が広がり、芝土手を伴った追廻馬場までが城下町とされるようになったためと考えられる。ここでは、材木町「竹土手」付近までしかなかった宮川の石垣が、更に南の馬場まで築造されており、かつての川原をしっかりと城下町に取り込んでいることが分かる。その結果、城下町の南岸であった材木町の「竹土手」は意識から消え、石垣下の溝が単なる城下町の排水路として描かれるに到ったのである（図7）。

おわりに

ここでは、「竹土手」の変化から城下町拡大の過程を考えてみたが、そもそも、さして大きな川でもない藪田川に沿って嚴重に「竹土手」を配置し、大川である吉井川の「竹土手」が消えていく中でも、藪田川の「竹土手」を後世まで残していったのはなぜなのかという疑問が残る。そこには、形式的かも知れないが、堤防の保守を超えて、西からの攻撃に対する城下町の目隠しや防御の意図があったとは考えられないだろうか。津山の城下町があくまで津山城と一体のものであるとするならば、惣構え的な意図も考慮に入れて、当時の社会情勢と共に更に考察を深めていくことも重要な課題であろう。



図5：船頭町堤防と町家、津山景観図屏風、当館寄託



図7：材木町南の溝、津山城下町図、当館蔵

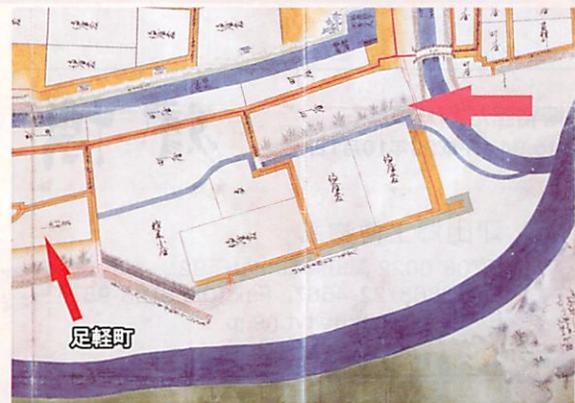


図6：材木町の竹土手、美作国津山城絵図、内閣文庫蔵

## 長期休館のお知らせ

津博92号でお知らせの通り、  
当館建物の耐震診断を行った結果、震度6強以上の地震に対し、  
所要の耐震性能を有していないことが判明しました。  
そのため、この度、建物の耐震化工事を実施いたします。  
この工事の実施に伴い、本年12月29日より平成32年4月まで休館とさせていただきます。  
当館ご利用のみなさまには、大変ご不便をおかけすることとなりますが、  
ご利用者のみな様や博物館資料の安全確保のため、重要な事業となりますので、  
ご理解・ご協力をいただきますようお願いいたします。  
なお、休館中につきましても各種講座、文化財めぐり、  
刊行物の刊行等の事業は引き続き実施する予定です。



博物館キャラクター  
「鵜若」

## 今後の友の会について

現在募集しております「友の会」につきましては、  
休館中も引き続き活動をいたします。  
休館期間中は、展示を見ていただくことができませんので、  
年会費を通常の1,000円から半額の500円にて募集をいたします。  
なお、博物館だよりや文化財めぐりのご案内等は通常通り送付させていただく予定ですので、  
今後ともよろしく願いいたします。



博物館キャラクター  
「ファイアー」



博物館キャラクター  
つきよのすけ  
「津郷之介」



博物館だより「つはく」  
No.94 平成29年10月1日

津博  
TSU-HAKU

【編集・発行】津山郷土博物館

〒708-0022 岡山県津山市山下92  
Tel (0868) 22-4567 Fax (0868) 23-9874  
E-mail tsu-haku@tvt.ne.jp

【印刷】有限会社 弘文社

### 入館のご案内

【開館時間】午前9:00～午後5:00  
【休館日】毎週月曜日・祝日の翌日  
年末年始(12月29日～1月3日)・その他  
【入館料】一般…200円(30人以上の団体の場合160円)  
高校・大学生…150円(30人以上の団体の場合120円)

中学生以下・障害者手帳を提示された方・  
市内在住の65才以上の方は、入館料が無料です。